

美々之多礼也味(耳の垂れ病)の薬方(下)

夏井 高人

4 庭見薬

『大同類聚方』巻之六十五の「美之多礼也味」には、庭見薬の薬方が収録されており、その薬方中にも石斛と推定可能なものが含まれている。

庭見薬の読みは不明だが、おそらく、「にわみくすり」と読むものだろうと思われる。文節の区切りも不明だが、「にわ」という名の御薬（みくすり）と解釈すべき余地がある。倭名類聚抄等には類似の名前が見当たらないが「には（にわ）」という地名はある¹。

4.1 庭見薬の上奏者

『大同類聚方』には、「滝原鎌児麻呂之家方也」とある。滝原鎌児麻呂については全く不明と言うしかない²。「滝原」と同じ読みだと推定される神社としては、瀧原宮（三重県度会郡大紀町滝原）³と多岐原神社（三重県度会郡大紀町三瀬川）⁴がある。また、「たき」と読める地名としては、多気郡多気町があり、空海と縁のある丹生山神宮寺（多気郡多気町丹生）がある。「庭見」の「庭」が「丹生」だとすれば、丹生山神宮寺と関連する薬方だと推定することも可能となる。いずれにしても仮説の域を出ず、確定することができない。

4. 2 庭見薬の適応症

『大同類聚方』には「男女共爾大病乃後耳塞之比天不聞音物乎耳中鳴利逆上利耳底濡礼出天悪臭乎流_[之]気逆不止爾与布」とある。

意識すると、「男女共に、大病の後に耳が塞がって、物音が聞こえず、耳の中が鳴り、耳の奥がじくじくと濡れ、(膿が) 逆上して流れ出て、悪臭を放ち、気逆して止まらない者に与える処方」という意味になる。

「気逆」について、通説は、「げっふ」の意味だと解している⁵。しかし、頭痛・発熱等によってイライラする状態や陰鬱な気分になる状態のことを指すと解するほうが妥当ではないかと思われる。

ここに示されている症状は、細菌感染等による中耳炎のような疾患で、かなり重篤な状態にあるものを指すと推定することができ、「美之多礼也味(耳の垂れ病)」の他の薬方の適応症とほぼ同じと考えられる。

4. 3 庭見薬の処方

『大同類聚方』には、「古万久佐 以波久須利 加万保乃古 美豆布天 邇古久佐 五味乎水爾煎天与」とある。「コマクサ、イハクスリ、ガマホノコ、ミズフデ、ニコクサの5種を水で煎じて与える」という意味になる。

「コマクサ」については、「比布利也未比(日震病)の薬方(中)」らん・ゆり 441号 10～21頁で特に詳細かつ徹底的に検討したとおりで、結論から言う

と確定することができないのだが、現在のコマクサ (*Dicentra peregrina*) が該当する可能性は否定してよいと考える。別の植物の可能性を検討しなければならない。

「イハクスリ」は「石斛」を指すものと考えることができる。

「ガマホノコ」は、ガマ科ガマ属のガマ (*Typha* spp.) の花粉すなわち生薬「蒲黄 (ほおう)」を指すと解されている⁶。

「ミズフデ」は、武藤本・畠山本では「ミズフキ」と記載されており、スイレン科のオニバス (*Euryale ferox*) ⁷すなわち生薬「芡実 (けんじつ)」を指すと解されている⁸。

「ニコクサ」については、通説は、ネコクサ (虎耳草) すなわちユキノシタ (*Saxifraga stolonifera*) のことだとしている。しかし、「丹波薬 (タニハ薬)」との関連で、「比布利也未比 (日震病) の薬方 (中)」らん・ゆり 439 号 12 頁でも検討したとおりで、不明というしかない。

これら庭見薬の処方は、比布利也未比 (日震病) の薬方としての「丹波薬 (タニハ薬)」と共通する部分が多い。「庭」を「丹波」と解するとすれば、もともとは同一の薬方だった可能性があると考えられる。そして、この仮説が正しいと解することができる場合、「丹波薬 (タニハ薬)」も「には薬」と読むのが正しいということになるかもしれない。「丹波」、「但馬」、「丹生」等は、全て「にふ」または「には」と読むべきもので同一だった可能性がある⁹。

[注記]

¹ 『倭名類聚抄』元和古活字本の巻五東海部第六十一の「尾張國」には、葉栗（波久利）の次に「丹羽」とあり、その読みに「迹波」（「迹」は異字体）とあり「漚波」と同じなので、「にわ」と読むことができる。これが庭見葉の庭と同じだと仮定する場合には、庭見葉は「丹羽御葉」であることになる。つまり、「但馬葉」の隠し字のようなものであり得る。「波久利」は「はくり」と読むと推定され、「はくり」との関連性がある。「はくり」または「はくろ」については、夏井高人「貝原篤信（益軒）『大和本草』の石斛 らん・ゆり 443 号 12～22 頁で述べたほか、夏井高人「保久利（ホクリ）—伝統的な有用植物の特定と法的保護」法律論叢 87 巻 4・5 号（2015 年 3 月刊行予定）で更に詳細な検討を加えた。

² 「滝原鎌児麻呂」との名の中で「滝原（瀧原または多岐原）」を地名と考えると、名は「鎌児麻呂」となる。「鎌児」は「藤原鎌足（中臣鎌足）」の「鎌足」と酷似しており、「中臣鎌子」の「鎌子」と同じと考えることが可能だ。すると、「鎌児（鎌子）」とは、名ではなく官職名だったかもしれず、あるいは、あだ名のようなものだったかもしれないという可能性が出てくる。あだ名だと仮定する場合、「框（かまち）」をもつ御殿に棲む貴人とでもいった趣旨だったかもしれない。当時の建築水準からすれば、戸や窓等の部分を框で装飾してある家屋は、御殿（宮殿）と言えるレベルのものだったということができる。あるいは、「鎌児（鎌子）」は、「竈神」と関係する者あるいは稲穂を刈る鎌と関係する者（秦族）という趣旨だったかもしれない。仮にそうだとした場合、例えば、「中臣鎌子」あるいは「中臣鎌足」との名詞の中には実名が何一つ含まれていないという結論が導かれ得ることになる。ちなみに、竈神は、ゾロアスター教に由来するものかもしれない。ゾロアスター教（拝火教）の本来の教義及びその後の変質については、メアリー・ボイス（山本由美子訳）『ゾロアスター教—3500 年の歴史』（講談社学術文庫、2010）が参考になる。ゾロアスター教の社会では、バラモン教やヒンズー教の社会と同様に、社会的な身分制度が存在する。そこでは、武士（王族）、僧侶、平民、奴婢の 4 つの階級が存在する。日本の古代は、正史における神武天皇の東征や天孫降臨の記述にもみられるとおり、武家（王族）による軍事征服によって樹立された武家社会を始まりとしている。武士（王族）以外の階層としては、僧侶（神官）、民、奴婢が存在する。奴婢は、東大寺正倉院の文書等により存在が確実なものとして既に証明されている。このような社会体制は、ゾロアスター教、バラモン教、ヒンズー教等を信仰する部族の渡来を前提に考えないと全く理解できない。日本史の通説ではそのように解していないけれども、日本国の歴史は武士（王族）による武家政治により開始されたと理解するのが合理的だ。ただし、独裁制だったかどうかについては疑問があり、天皇を国の象徴として国家の長としていても、実質的な政治的・軍事的な権力構造としては、複数の軍事豪族による合議制的な状態が長く続いた可能性がある。このような仮説を前提とすると、神武天皇による日本国建国以来、第二次世界大戦終戦まで、武家（軍事的統帥権をもった豪族）による国家統治が連綿として続いていたと

解釈することになる。天平時代～平安時代の支配階級である貴族が本来的には「私的な軍事力をもった豪族ではなかった」という確証は全くない。それどころか、平安貴族の本来の正装は帯剣の姿であり、貴族の狩衣では弓矢を身に着けるものとされている。古い神社の神官にはそのような装束が伝承されている。ただし、本来は武家または軍事豪族だった有力氏族であっても、貴族としての奢侈や贅沢によって墮落し、武家としての実力を次第に喪失した家系が多数あったと推定されることを否定する趣旨ではない。『平家物語』を読めば、そのことは歴然としている。新井白石『読史余論』における日本国建国以来の古代史観は、古代の天皇による親征を重視する記述から始められており、私見と同様のものとして解釈・理解することが可能だと考える。既に述べたとおり、このような古代からの身分制度は、現行の日本国憲法では禁止されており、国民は、法的には全て平等とされなければならない。³ 倭姫命を祭神として祀っている。『倭姫命世記』に縁起があるけれども、謎の多い神社の一つだと言える。

⁴ 麻奈胡神を祭神として祀っている。「御瀬社（みせのやしろ）」、「真奈胡神社」との別名もある。麻奈胡神は、倭姫命が五十鈴川を遡ってきた際、難所を無事に乗り越えることができるように案内した地元の神ということになっている。おそらく、渡会郡の「渡会」との名との関連を有するものだと推定される。麻奈胡神は、倭姫命が居所を定める際、その守護となった豪族ではないかと思われる。樋ノ谷遺跡（三重県度会郡大紀町神原）は、そのような豪族と関連のある遺跡かもしれない。縄文時代からの遺跡がある一方で古墳時代の遺跡も多数あることから、在来の豪族が倭姫命を守護するというかたちでその地方的な政治権力を継続して維持することができたということを示すものとも考えられる。周辺には「阿曾」、「綿」等の地名があり、秦族等の古代の有力豪族との関連性が存在することを示している。このように考えると、「鎌児麻呂」は「麻奈胡神」の子孫であり、多岐原神社の宮司家を意味するものだと想像することもできる。

⁵ 前掲『全訳精解大同類聚方[下]処方部』417頁

⁶ 前掲『全訳精解大同類聚方[下]処方部』417頁

⁷ オニバスの原産地はアジア南部とされている。渡来種である園芸植物であり、生薬原料として湖沼等で栽培されていたもので、日本に自生していた野生植物ではないと推定される。現存するオニバスの個体はそうのように植栽されていたオニバスの子孫ということになるが、人々が天然の湖沼や自然流水を生活のために用いなくなくなり、水質が悪化したり池沼が埋め立てられたりした結果、その個体数を激減させていると理解するのが正しい。

⁸ 前掲『全訳精解大同類聚方[下]処方部』417頁

⁹ 古代豪族の丹羽氏（良岑氏・良岑朝臣）は、桓武天皇と百濟永継との間の皇子・良岑安世を祖とするとされている。百濟永継は、飛鳥部奈止麻呂の子とされる。飛鳥部奈止麻呂の名は、「奈登麻呂」、「奈杼麻呂」、「奈止丸」ともされ、おそらく「夏麻呂」が正しいのだらうと推定される。すなわち、飛鳥部氏は、百濟国からの渡来人（またはその子孫）ではなく、華夏だったと推定することが可能となる。このように解する場合、「夏麻呂」とは「夏姓の男性王」とでもいう意味を有し、「夏彦」

と同じようなもので、固有名詞ではなかった可能性がある（『三国史記』巻十六「高句麗本紀」には、高句麗山上王二十一年八月の条に、「漢平州人夏瑤 以一千家来役王納之」とある。これは、『日本書紀』にある秦族渡来時の記述と酷似するもので、漢姓夏の華夏が存在した可能性を示唆している。『三国史記』にある「夏瑤」との名は、高句麗王を「夏瑤」よりも上位として位置付けるために修飾の一種がなされており、本来は「夏王」だった可能性を否定することができない。中国三国時代の魏・晋では夏侯氏という有力豪族が存在し、一般に、曹氏や司馬氏と同じく鮮卑族中の有力豪族だったと理解されている。夏侯氏も本来の漢姓は「夏」だった可能性があるのではなからうか。なお、「美々之多礼也味（耳の垂れ病）の薬方（下）」脚注31で示すとおり、秦族宗家の漢姓は「許」だった可能性があることから、複数の異なる漢姓を有する華夏が混在していたのだらうと推定される。なお、「高句麗」に関する中国学者による最近の研究成果については、張福有『集安麻綫高句麗碑』（文物出版社、2013）、李健才『東北亞史地論集』（蘭州大学出版社、2010）が参考になる。）。そして、良岑安世は空海と親交があったとされていることから、庭見葉が空海ゆかりの丹生山神宮寺（多気郡多気町丹生）と関連する薬方だった可能性を肯定し得ることになる。なお、良岑安世は、桓武天皇の子とされるが、正室の子ではないので天皇となることができなかつたとされている。しかし、嵯峨天皇の時代において相当有力な貴族（公家）だったことは否定しようがなく、むしろ、実質的な権力者だった可能性もあると考えられる。『日本後紀』の編者として知られ、漢詩に優れていたとされる。もともと華夏の家系だったと仮定すれば、むしろ当然のことだと理解することができる。良岑安世は、大同年間には但馬守に任ぜられているから、その名に関する限り、「庭見葉」及び「丹波葉」と縁があるということもできる。そして、更にマクロ的にみても、蘇我氏、阿蘇（阿曾）氏、飛鳥部氏は、全て同氏だったのではないとも考えられる（「蘇我氏」はもともと存在せず、実在したのは「飛鳥氏」だったものが、白村江の戦以降の政変により、史書上では「蘇我氏」として記録され今日に至ったとの仮説をたてることもできる。）。日本国において壬申の乱～大宝律令あたりの時代に起きた真実の歴史上の出来事は、一般に、日本史学の通説が理解しているようなものとは相当異なるものだった可能性を否定することができない。『古事記』及び『日本書紀』は、壬申の乱を正当化するために編纂されたもので、歴史上の出来事を古代の神々の事跡に置き換えて記録したものだとの見解があり、傾聴に値する。しかし、私見としては、嵯峨天皇の時代とその前後の時代に起きた様々な出来事を丁寧に検討するほうがより生産的なのではないかと考え始めている。梅宮大社（京都府京都市右京区梅津フケノ川町）では、本殿四座として、酒解神（大山祇神）、その娘・酒解子神（木花咲耶姫命）、その夫・大若子神（瓊ヶ杵尊）及びその子・小若子神（彦火火出見尊）を祭り、それらの神と対をなすように相殿四座として、橘清友公、その娘・橘嘉智子（壇林皇后）、その夫・嵯峨天皇及びその子・仁明天皇を祭神として祀っている。